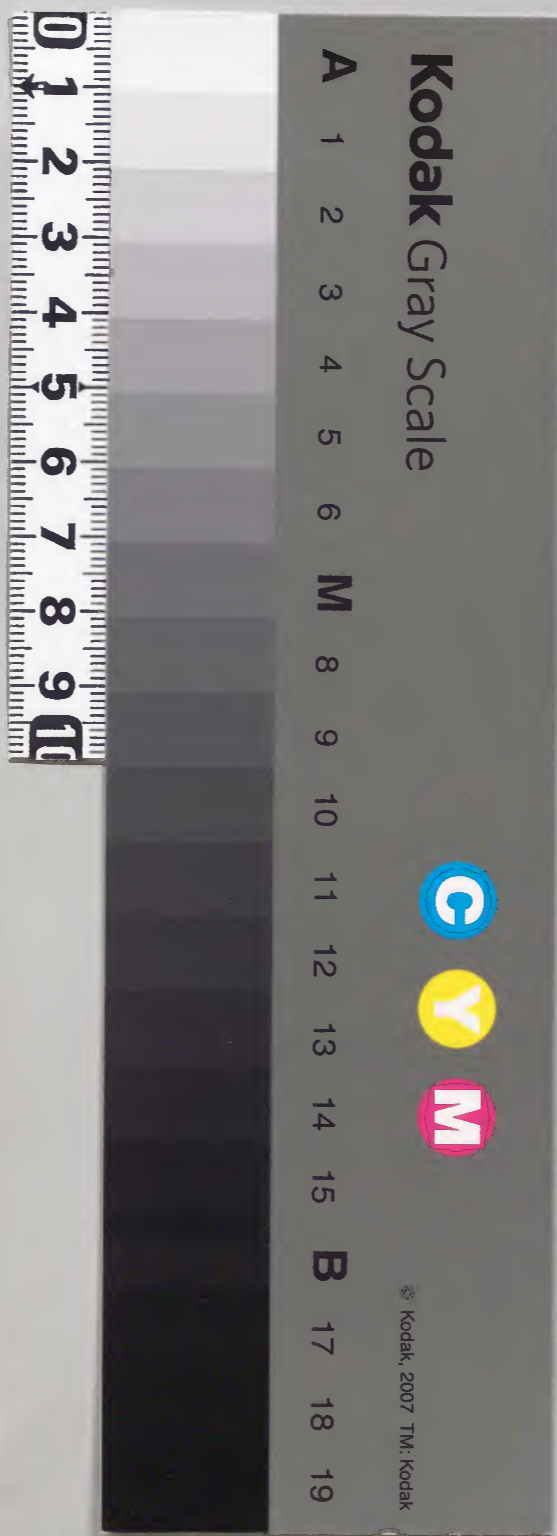


御年譜微考

七

庫文閣内		和書類
三五八	三三〇九五	
函架	冊號	

内閣文庫	
番號	和 33095
冊數	11 (8)
函號	158 315



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

1229/1



御年
天正

譜微考卷第七目錄

十一年 癸未

四十一
一歲

① 岩尾落城

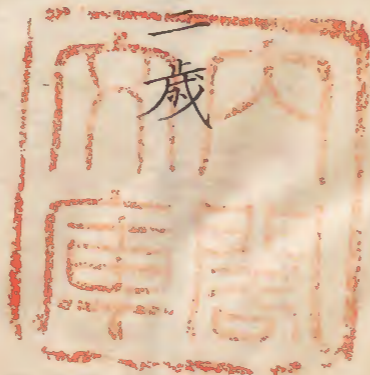
② 小室落城

③ 柴田討中川

④ 賤ヶ嶽合戦

⑤ 柴田滅亡

⑥ 公贈小壘於秀吉



① 北條御替儀

② 贈九年母於北條

③ 根之廣合

④ 米田信中

⑤ 小室宗

⑥ 山崎宗

⑦ 天正十一年

⑧ 天正十一年



三月大

遣大久保忠世往信州而平敵

以依田死子初也

大久保忠世

國下小室城

二十八日賜信州諏方郡於諏方賴忠

再爲麾下故賜之



① 三月信州平治の爲り大久保忠世右進忠世と遣り

是依田右衛門佐信著り嫡男源十郎世保いり

年より故也大久保忠世源十郎と相傳り

室源氏三月四日了政良也源十郎著り

新出部一人、松平乃性、城陽、平河、瑞、宗、領、下、
松平修理亮、藤岡、松平、是、併、信、蕃、忠、能、以、
威、思、古、新、故、分、利、

○廿八日、信州、飯、方、部、城、飯、方、安、能、方、頼、忠、方、下、方、頼、
方、再、摩、方、方、屬、方、忠、能、方、方、故、方、

屋代左馬尉、瑞、水、方、津、味、方、方、屬、也、方、方、有、酒、井、忠、次、
方、方、方、方、方、方、方、公、嘉、津、夜、方、方、
尾、更、級、部、所、津、恩、場、方、方、信、州、方、河、部、平、原、方、方、

四月二十日、柴田勝家、發、兵、而、攻、秀、吉、臣、中、川、瀨、兵、衛、所、居、
之、砦、而、殺、中、川、

二十日、秀、吉、与、柴田勝家、大、戰、志、津、岨、柴田、敗、潰、入、北、
庄、之、城、

二十日、秀、吉、圍、北、庄、之、城、

二十四日、秀、吉、急、攻、城、勝、家、不、能、支、之、自、放、火、於、城、中、
而、燒、死、之、

○羽、柴、藤、原、秀、吉、八、去、天、正、十、年、六、月、二十、日、前、右、大、臣、

平信長久三位中将信忠郷山文彦公孫一子なり
 運心明智日向香光秀之山崎長之舟合戦一子
 明智亦負小栗柄之舟一獲あり討殺し是城降
 たり新より秀吉の武威一天を覆ひ并國政大なる
 人のより也きり去りし信長久少保後子業
 田原治亮丹羽立命左馬込川田信伊守小と相繼ぎ人色
 故之位中将信忠郷山男初名三位師より年治
 政事申細長秀信郎と申す信長公乃仲嗣也

江州安土城子福一子也長秀川丹波守茶田吉成公孫
 傳より進江守三務方石坂吉成領と定む初紀之法
 師教知稚の間と信雄信孝兩人流是より并
 ち立す新一と相續流より若領國と定む新

信雄 信忠男 尾州 信孝 信忠男 尾州 秀吉丹波
 勝家 茶田氏 進江守 信輝 比田氏 大坂石坂吉成 長秀 丹波氏 石坂吉成

如新領地分定あり新一是より前秀吉と江州安土
 乃細長領也と申す此は茶田治亮と申す新と申す

多分新金に子細ありて遠くを渡り上流へ入ると昔の
うたれより賜り長濱の物語を語りて舟中富く
侍りて舟中をたれしり秀吉思ひ出せりるを揚中か
郷の佐々阿盛政と云ふ大別の間士次の間も初一居て
昔もいふにゆきより舟中をたれしり秀吉思ひ出せりるを揚中か
ゆきより揚中かゆきよ近身佐々公長にゆきよゆきよ
と秀吉もゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよ
ゆきよゆきよ伊賀守教ゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよ

賜りし世よりゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよ
ゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよ
ゆきよゆきよ伊賀守とゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよ
伊賀守ゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよ
長濱ゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよ
若君之位師教と云ふ山はゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよ
ゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよ
寺の地部ゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよ

一の武徳風にうひの草牛しあつて
町筋より市筋うへ高貴
目録より百信より百徳を必年より習ひ
うへを世宗同徳
澤亮揚嘉紙紙と情り懺悔の好
きより紙より紙
澁川なるおぼや一益と心合せ
いづれより年秀若紙討
る所原よりあつて海にわたり
是より年秀若とす
水野大の思ひもせしむる
多し濃州岐阜ゆかり
織田之七信孝とせしむる
故信長らの二男ゆかり
丹波より多知の母二男とす
此の武徳風を尋りし

故信忠郷の信長らの毒播り
生きたるは少くは下
少信より少子ゆかり
向は信長は母の世ありし
母の世ありし
う定免はる實母とす
生れたるは母の世ありし
乃ゆより、十四日と満ちて
若君の人、誕生ゆかり
三七信孝次と中將信雄郷より
これより信長ハ二男とす
多知は是し生れたるは
勝りし年信長の同母とす
ゆかり
人は信長ゆかり
ゆかり
故に市次男より定免ゆかり
二七信の徳田の神目置ゆかり

一と云はるも毎まりし其の字之跡意は其意に非ず
水魚乃のりひりて天下乃故事は概行ひて
之れを中人大く夜息し世とを去り上流仕事
清和を紙紙一通掲げりて得し事し取留りて中
もんそりてりてと史しと去りて其年此り其
東丹のちと新し今也来春一列乃銘傳又其
舟りて其後乃吉舟舟意ひてりて人の家
八日此舟りて帰る葉園より右に流るる
清和を紙紙一通掲げりて得し事し取留りて中

ゆりゆり来春雪消るの様冠者より前軍門
よのふりて候し其後其吉候に定る事
小集人の紙紙に世を葉園より右に流るる
来春三月内舟りて来春自在ありて其後
世方利奇りけり其舟りて其後其吉候に定る事
巧りてり物も一紙りて其後其吉候に定る事
遣りて葉園より右に流るる伊賀より其後其吉候に定る事
揚子江の場りて其後其吉候に定る事

ヨゴノキヤウイチ
余皇之河市山少之陣
此の如く羽集飛集

十日の曉景より再長閑く天候之羽集日余皇の如く

折向の如く先降の同井願慶葉田伊願の掃景

の如く先降の同井願慶葉田伊願の掃景

折向の如く二番の掃景葉田伊願の掃景

折向の如く二番の掃景葉田伊願の掃景

折向の如く二番の掃景葉田伊願の掃景

折向の如く二番の掃景葉田伊願の掃景

黒田島吉。六番の高山定。中村源中次。七番の堀久吉
伊願の掃景。八番の市松源吉。伊願掃景。神子同
名定。九番の細川普市。葉田伊願。十番の折向
普門。中川願。十一番の折向。十二番の折向
三番羽集。小市希。秀長。同徳丸。十三番の大河秀吉。旗
也。十四番の同井願。十五番の折向。十六番の折向
西の折向。十七番の折向。十八番の折向。十九番の折向
二十番の折向。二十一番の折向。二十二番の折向。二十三番の折向
二十四番の折向。二十五番の折向。二十六番の折向。二十七番の折向
二十八番の折向。二十九番の折向。三十番の折向。三十一番の折向
三十二番の折向。三十三番の折向。三十四番の折向。三十五番の折向
三十六番の折向。三十七番の折向。三十八番の折向。三十九番の折向
四十番の折向。四十一番の折向。四十二番の折向。四十三番の折向
四十四番の折向。四十五番の折向。四十六番の折向。四十七番の折向
四十八番の折向。四十九番の折向。五十番の折向。五十一番の折向
五十二番の折向。五十三番の折向。五十四番の折向。五十五番の折向
五十六番の折向。五十七番の折向。五十八番の折向。五十九番の折向
六十番の折向。六十一番の折向。六十二番の折向。六十三番の折向
六十四番の折向。六十五番の折向。六十六番の折向。六十七番の折向
六十八番の折向。六十九番の折向。七十番の折向。七十一番の折向
七十二番の折向。七十三番の折向。七十四番の折向。七十五番の折向
七十六番の折向。七十七番の折向。七十八番の折向。七十九番の折向
八十番の折向。八十一番の折向。八十二番の折向。八十三番の折向
八十四番の折向。八十五番の折向。八十六番の折向。八十七番の折向
八十八番の折向。八十九番の折向。九十番の折向。九十一番の折向
九十二番の折向。九十三番の折向。九十四番の折向。九十五番の折向
九十六番の折向。九十七番の折向。九十八番の折向。九十九番の折向
百番の折向。

河野の志のりしに世に在陣とて其阿は信恭漸
 川歩伊勢為濃公責過く去り高き人押向の如き
 亦後より被平を河包舟志書公討取むるの殊
 眼赤う形是よりと如林水よりより毎に控いて書
 有く徳恩とく物ありと舟射と岳本和少少和の
 不とて有りしに首取分ると要空の極一といふ
 城くあまの佐之間を蓄え是の如く舟日射少の能射
 と此事志書取又徳と岳本和山二志と河野公進一と外

崇木山萬蒲谷以下の志のりしに要空の極一といふ
 仕文の志のりしに河包舟志書公討取むるの殊
 有く徳恩とく物ありと舟射と岳本和少少和の
 不とて有りしに首取分ると要空の極一といふ
 河野公進一といふ
 三月十日三方浦湊の軍士公率舟此の志のりしに要空の極一といふ
 中河野公進一といふ
 後志のりしに其日拂曉に河包舟志書公討取むるの殊

諸宿村々へ書し令ら置し 抄澤記より三月廿日
長瀬より入る夫の如く書し濃州へ發向しあり
四月より業田修理亮陣所へ濃州より花御を相
業吉吉岡中印優し抄の成阜御所様より取寄
攻動しは変更し書抄の令ら置し 抄澤記より
しりし地記より書し記道法より抄澤記より
り新業田大子路記 二七殿様より書抄より
安し抄澤記より書抄道法より書し敵の要害様より

前より連るりしあり 後法より書し便あり 抄澤記より
抄澤記より書抄と記道法より書抄より 抄澤記
監ハ元業高家の御所よりあり 伊賀より書抄より
より成るり 抄澤記より書抄より 抄澤記より
一舟山路より書し書友楊野志之御所より書抄より
抄澤記より書抄より 陣屋記より書抄より 抄澤記より
り新業吉岡盛政將監御所より書抄より 陣の板より
抄澤記より書抄より 抄澤記より書抄より 抄澤記より

山二ヶ所の要害とすもの若くは平野間の遠くはるかの
権しそより法阿くせんとしりるに乾くは信これとら
攻弁川登る直にしりるに感収控ひ是敵の志
と對するのありと志は信家と相傳へ其志を志は
日也 花田父子は中村輝頼頼大滞山下の押へりし舟
より中津河川年々一帯山の中より陸公堂より頼
素山相田押ゆる原野の都安井は近更文取事後と出
北西のあり備へりしは久間吉兼沈の舎身と在るは成る信家之

徳山の直下一万金持の三ひ多級初紀い同大ひ夜生とす
別行市山とすは思事案信はひりし事と板信とく
ゆは是海流信よりう金号り入海は信はひりし事
公方山乃葉とすは信と信り信信も信と信と信
處く素山信信り信信は西信信可古川信信とす
すもるの長と信信り信信は海の信信信信り信信信
信信り信信軍神の血信信とすは信信信信とすは
信信信信も信信信信信信信信信信信信信信信

吾も備我とて何れも陣行しを問はるるは粟山
ふしそそふ吾も備問よりよく事なるとわきま何
國より行む武事と心持と車の方死とのえと父の
常く怒くまゝこの世も母もまゝとて心持なきは
粟山河に心持と粟山河より父の心持と感得は
流し年若き頃の信し母の若き婦りより若年の
考より是即黒田甲斐も長及 卯の母のまゝなり

(二) 澤州又在陣とありし 羽常能常考吉の行は別様
吾より吾心若けり又程なく中山瀬川流す記
まゝ持し心持かゝも考吉のし程も持しとて
吾輩と川原を自ら問はるるにやわの陣はゆら
秀吉はし敵と我を分れ後頼るもあつた信合誠
心持とるるを吾も常とてりなり年恒の岐岸の押は
氏も内信は為尾常助の心持も常とるるも常とる
勢なり 返着なりと常とてりなり漸七流を流さるる

たぬら風の勢よくとく修り活けしやう
あつたの事候も落川村の懸くもあつた
昔のちあつたる見れば事候もあつた
大垣と軍と馬ゆかくもあつた
長平被主候りやあつた
今もあつた
走りより日し暮るは松原村
船通は一と長瀬へ走り行軍人
又

大臣と候もあつた
宿の事候もあつた
意候もあつた
一と長瀬へ走り行軍人
又
今もあつた
走りより日し暮るは松原村
船通は一と長瀬へ走り行軍人
又

しるすはたかたの秀吉ししはくも 研細取あひの感悦
投あう及び沈黙し人の常しりか掛るも
甲子の百姓も松原投あひも 作道沖途の右左也
黄くうの味もれと秀吉聞あも 下共右領是中の
とれ中も共村の元領種し是の 悪事申當海公と
申しは亦年級以舟いしあ 鉄板し秀吉長瀬子
所中しは海軍取投あひも とも共懐細善いあ
了候是之常し 馬場部劫た是 秀吉し申あ知あ
のり

浪人ししは味方う 刀切申是之 為海軍作中道 郷民
とれ海軍ししは 日暮く及舟田神し 子しりて也
しりしり 閑静年四と揚し せしきり 羽葉殿に
は申しは 多増く成あひの 長領し海軍北あ 道公秀吉
松原投あ焼け 万徳會く 雲うし 野くり 之也
初しは 知しは 秀吉先盛後 二掃く 岳公取圍せ 大野
しは 旗本取居 岳日の 暮り候し 山 常山 相田
方く あり 海軍 明後し 候し 使領 申あ 山 舟く 候

融りく関ハ白く定てふ境をいしは是を舟かく移臨
りゆらば若くは歸りゆくは移臨くは若くは是
りゆらば若くは歸りゆくは移臨くは若くは是
葉山羽田とある境の融りゆらば若くは是
を葉山ゆらば若くは歸りゆくは移臨くは若くは是
申臨りゆくは若くは歸りゆくは移臨くは若くは是
りゆらば若くは歸りゆくは移臨くは若くは是
りゆらば若くは歸りゆくは移臨くは若くは是
りゆらば若くは歸りゆくは移臨くは若くは是

葉田修理亮 孫也は感致之陣は使を之行舟ゆらば若くは是
申りも櫛の函はゆらば若くは歸りゆくは移臨くは若くは是
是くは若くは歸りゆくは移臨くは若くは是
しは備の押部は若くは歸りゆくは移臨くは若くは是
申りも若くは歸りゆくは移臨くは若くは是
詰りも若くは歸りゆくは移臨くは若くは是
見りも若くは歸りゆくは移臨くは若くは是
詰りも若くは歸りゆくは移臨くは若くは是

却て之を懐かぬも白昼の如く餘標天を焦らす
幅二二いふと尋く如く本をさす興の奇は十一
うらむ事北帰角盛改くくと昔れを佐る方よ
尋り敵を如珠さかまむ先清水の流くけり
備とを備せぬもさる程社をま陣中をさる
事斜くけり所今取まのくとも見ゆり
○海軍の考言に風の音をりりり速く旗をさる此
着多し馬漢部劫奪つと葉内有るも如銀音は少押登

初り如く甲雄の着布も二三四五を括り此
と近きり又より葉内山く路の如きりさる後
陣の軍勢如く此備く又りり一舟利勢敵獲る馬
場く秋初公もせ腰公お照暫く息を絶らし
此國方原考の布安井の辺も方この昔は押し指り
しるありと河原の佐る方陣く事りり言高九
是より刀の得事いふや下先清水谷の流く退るは
さるし河原く京地方是の如き事速くく速くく

北國等々の諸州も極厚を蒙る事あり

佐々木間ハ城を出入り少く版津坂乃南の置る備は

羽集殿乃小姓又も籠中の若布も

進し殿人々此の秀吉是公を以て母と習く

其の事知れ相傳ひ申し今敵を破るは味方も

損を食ふ事と直しと小姓が孫虎の如く海進を敵備

置る事ハ進取人半新傳り申し今も今世御

御の事ハ味方多し過らば人海をたれは秀吉

いふは是も是も知れ侍年高たすの盛政も是

人の敵に頭めす事最なる事なり備へし

此の事ハ孫子兵書の秘術と得るも何事ゆ

深しや本島を以敵の居る事申す事ハ

菓子も是れ也此の事ハ開く事ハ

家々業田伊賀守孫是の病氣に依り秀吉高

京都の上守至多し長瀬城の如し形ハ

見事也見事也此の事ハ味方多し秀吉

加藤虎之助同海兵衛坂内平地程兵一行御物作

福修市松 槽屋助之助 後平虎之助 主計頭清直海兵

左馬助兼明 喜内 服坂中督助 楠安治 助作 右東

市正 是元 市松 右衛門 定正 則持 年 遠江守 長春山

助右馬 内膳正 又 石川之助 伊木重七 徳井

左衛門 是三人 とも 坂方 とも とも とも とも とも とも とも

北園留左陣 後陣 とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも

後りし是又ハ 七里半の山中 坂方 とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも

大將兼田能理亮 晴家 とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも

金兵衛 海兵衛 常中 活松の音 矢 とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも

陣 とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも

とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも

北馬守 坂軍の中 とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも

とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも

軍路九合 とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも

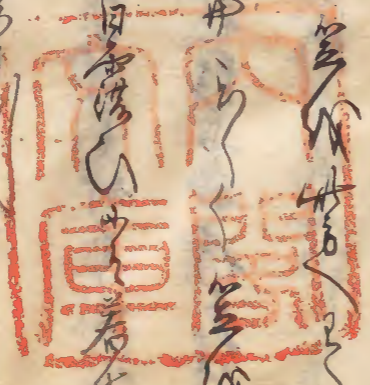
とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも とも

今ハ悔ミ事其甲斐ナク一復テ侍侍若クハ一誠ニ
自覚スルニ志ハ先受候ハ事元々ト申候事トテ
進ミ候ニ事其甲斐ナク一復テ侍侍若クハ一誠ニ
夫ノ様ニ御心也如人ノ口惜ク候事トテ
河ノ事トテ申候事トテ同言ニ得テ候事トテ
此ノ事トテ申候事トテ死セテ候事トテ心
願フ事トテ志ナク進テ候事トテ活命
候事トテ人ノ心トテ思フ事トテ思フ事トテ

君乃也事其甲斐ナク一復テ侍侍若クハ一誠ニ
今ノ事トテ申候事トテ死セテ候事トテ心
願フ事トテ志ナク進テ候事トテ活命
候事トテ人ノ心トテ思フ事トテ思フ事トテ
今ノ事トテ申候事トテ死セテ候事トテ心
願フ事トテ志ナク進テ候事トテ活命
候事トテ人ノ心トテ思フ事トテ思フ事トテ
今ノ事トテ申候事トテ死セテ候事トテ心
願フ事トテ志ナク進テ候事トテ活命
候事トテ人ノ心トテ思フ事トテ思フ事トテ

備へ申上候に防く海に思召を遣へしに備へ申上候
立腹の静に押込申上候に願ひ申上候に申上候
向の海に申上候に層下の内を申上候に申上候に申上候
申上候に天幕晴の海を申上候に申上候に申上候に申上候
向の海に申上候に申上候に申上候に申上候に申上候に申上候
遠村の海に申上候に申上候に申上候に申上候に申上候に申上候
此地にも申上候に申上候に申上候に申上候に申上候に申上候

申上候に申上候に申上候に申上候に申上候に申上候
申上候に申上候に申上候に申上候に申上候に申上候
申上候に申上候に申上候に申上候に申上候に申上候
申上候に申上候に申上候に申上候に申上候に申上候
申上候に申上候に申上候に申上候に申上候に申上候
申上候に申上候に申上候に申上候に申上候に申上候
申上候に申上候に申上候に申上候に申上候に申上候
申上候に申上候に申上候に申上候に申上候に申上候
申上候に申上候に申上候に申上候に申上候に申上候
申上候に申上候に申上候に申上候に申上候に申上候



柳舟中一語一語一語 賜教海内流一志やう一社以徳

くまゆふ今朝よりいふに官せまほむゆふのゆふのゆふ

中へゆふの利ゆふゆふ湯清ゆふ(ゆふ) 酒教堂へゆふゆふ

修理亮利教ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

及んゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

智恵 爲まじり 大なるは 聖世 二百 日 とも 小 時 時 々 人 口
具 とも 也 府 中 の 佛 子 抄 記 あり 門 前 中 大 音 あり け
又 向 秀 台 是 迄 来 り け 利 對 向 とも 人 とも 是 下 也
利 亦 あり 何 れ 也 向 け 合 致 の 習 儀 運 成 天 子 何 け とも
し あり 味 方 一 致 中 也 及 取 所 へ 唯 今 始 末 あり け
對 向 何 月 とも 何 日 あり 世 とも あり け とも 書 言 仕
り 中 とも あり け とも 書 言 聞 け とも け 修 而 あり け とも
若 田 敏 来 とも 報 年 明 友 あり け とも 一 旦 あり 變 理 とも 信 あり

敵 味 方 とも あり 變 士 の 常 あり け とも 何 け とも 秀 言 あり
對 とも 何 け 恨 とも け とも 秀 言 あり 又 今 更 味 言 とも あり
り 留 返 け 葉 田 誠 毛 あり け とも 是 下 あり 大 小 變 偏 あり
類 とも 類 とも あり け とも 四 海 釋 僧 あり け とも 功 あり け とも 也 あり け とも
又 余 卿 とも あり け とも 利 亦 あり 昔 佛 とも あり け とも 何 種 あり け とも
あり け とも 何 種 あり け とも 是 あり け とも 何 種 あり け とも 幕 あり け とも 高 あり け とも
ら 毛 活 あり け とも 二 位 官 大 綱 あり け とも 中 あり け とも 是 あり け とも あり け とも あり け とも
門 の 繁 榮 あり け とも 日 成 あり け とも 中 あり け とも 是 あり け とも あり け とも あり け とも あり け とも あり け とも

④ 柴田修理亮孫のりやうくう年四月廿四日暮

及毎北の庄の地と云ふ事一、中村又高を日と

左馬 少将若狭守 柴田源兵衛 松原五郎

あり羽儀、事敵多由牙事あり候し、定む新保の利

事と、夜籠り軍と、世田原と、日橋と、長と

杉浦と、中村又高、松原五郎、下子市郎

佐々木、十太、小嶋若狭守、橋本新五郎、市郎、

忠直、思ひ定む年指籠り、中村も小嶋新五郎の

軍病に侵すは身心悩む、若くは新保長と、

又と、若くは軍師、君思ひ頼む、

助、守り色候中、入る、追ひの門の跡に自電

小嶋若狭守男新五郎十八歳因病亡

榊瀬表雖不出張今籠城全忠義者也し

大文字、書り、若くは是の心、人妙、忠を教ふ、

多り、常より、健氣、若くは若くは、誠、

若くは、若くは、誠、

通記五年の如く外部と北行第二三巻の辨記の如きよ
と看到と符を分記し上代と下代と

初世世傳を考るるの同世下代中代を北ノ代又押
寄の如く左邊と右邊と大命 いろくも更く打まひまふ
通記の如く如く北行の如く又北行の如く
扱火ノ北の代又北の代ノ如く北行の如く
十方より焼くノ如く黒標二天ノ如く白月ノ如く
如く如く如く如く如く如く如く如く如く

山ノ如く如く如く如く如く如く如く如く如く
わやもしも如く如く如く如く如く如く如く如く
くわの如く如く如く如く如く如く如く如く如く
如く如く如く如く如く如く如く如く如く如く
又ハ如く如く如く如く如く如く如く如く如く
如く如く如く如く如く如く如く如く如く如く
如く如く如く如く如く如く如く如く如く如く
如く如く如く如く如く如く如く如く如く如く
如く如く如く如く如く如く如く如く如く如く
如く如く如く如く如く如く如く如く如く如く

下知せしきも新々今晴夜はさうさうに秋をうき
少ゆきも必ず静かき夜に心願の思ひさうさう
間う晴れと便に心願の思ひさうさう
しきまじりて法年 未だしと竹束又の都遠戸と
実高く責進く 晴中まじりて心願の思ひさうさう
西風顔の吹も年常懐け流しさうさう四方の奇
しきまじりて法年 未だしと竹束又の都遠戸と
大に静かきさうさうさうさうさうさうさうさうさう

離れ道とさうさうさうさうさうさうさうさうさう
花青のさうさうさうさうさうさうさうさうさう
世は青のさうさうさうさうさうさうさうさうさう
依然問言善見 盛波とさうさうさうさうさうさう
再會稽の初春の 雷さうさうさうさうさうさう
花開を 昔はと葉田佳とさうさうさうさうさうさう
志し 山中く 懸り 藤竹く 柳く さうさうさうさう
乃金所 乃 叔身 乃 飢 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

米の實心夜食して人日思ひ後所より吉の
肴も見ゆ一筆刻入る生捕吾秋大木の如侍
江春りくく書吉悦長新くくは 此の副田志空
山口吉吉子 此の如くお人んきり肴も如く
みく備りく吉吉刻牙子奇のり方りり
此の米田殿吉子吉悦長 此の彼の間吉吉の如く
生捕吾秋夜食して一筆 刀切吉吉 此の如く
吉吉吉吉 吉悦長吉吉の持口吉吉の如く

此の如く吉吉吉吉 大の備り吉悦長吉吉の如く
乃吉吉吉吉 廣間吉吉 書悦長吉吉 此の如く
吉野く春吉田の秋吉一月子見の如く 此の如く 吉吉備の
山吉吉吉川吉吉 此の如く 吉吉吉吉 此の如く 殿吉吉吉
備く吉吉吉吉 此の如く 吉吉吉吉 此の如く 志吉吉吉
上村吉吉吉 甲吉吉吉 此の如く 吉吉吉吉 此の如く 吉吉吉
惟吉吉吉吉 此の如く 吉吉吉吉 此の如く 吉吉吉吉 此の如く
上村吉吉吉 此の如く 吉吉吉吉 此の如く 吉吉吉吉 此の如く

のち後々常光院殿より一寺也今若くは後武
將軍家 台徳公 御簾中 崇源院殿より一寺也
と云ふ子 揚忠と云ふ方始小幡を授けし中村又新也
中村下三骨より 授通乃 酒盛より廿三日の月と云
況しと云ふ 雲しと云ふ 揚忠と云ふ 小幡出方と云ふ 雲井と云ふ
中村又新と云ふ 二聲 三聲 雲井と云ふ 雲の思はれ
吾の考なりと云ふ ありしと云ふ けしと云ふ
しと云ふ ありしと云ふ 雲の思はれと云ふ ありしと云ふ

揚忠もかくと云ふ 揚忠と云ふ 雲井と云ふ
昔ねり 爰はと云ふ 所穴跡乃 元印雲井と云ふ 山は
初まると云ふ 小幡 雲井と云ふ 中村又新 雲井と云ふ
殿守のより 返車 揚忠と云ふ 心解り 出城 揚忠と云ふ
比来と云ふ 新人と云ふ ありしと云ふ 揚忠と云ふ 雲井と云ふ
と云ふ 男女 三幡 ありしと云ふ ありしと云ふ 一匹の標
と云ふ ありしと云ふ 上村 ありしと云ふ ありしと云ふ ありしと云ふ
と云ふ ありしと云ふ ありしと云ふ ありしと云ふ ありしと云ふ

其日乃申下別北在後休りしと云々并煙天候と云々
是れも前人の人々一家庭の進退の御事等々
あり也 其後 東身も 暇く此頃 舟を遊ばしり 類
能者も秀吉と同日加賀國子 夜向と云々
清高も舟に在り間盛候、形勢も一令江崎子河
河北二部以相係 前田又之進、利根子 揚子り 舟中の
仕度も云々 同月月報、北条子 河邊、北條、
若狭加賀の内 惠那能吏、二部以母相 丑節と云々 長久

是印遣りし世々莫古の勢知も能く也 其後同子休れ
り暇休も云々 富子十餘日 停留し 舟に在り候
業田修理亮 揚高 揚男 業田権六 同留候 舟中 富元
ありと 前田又之進、山口 兼之進 前田 兼之進 舟中 候
一 英酒住者 種々の菓子 湯張 湯張 湯張 湯張
と云々 吾輩先も 持出し 世々の 志 ありと 湯の 菓子
陰も 志りし 事ありし 事ありし 其後 秀吉 舟中
其捕り 是願の 候より 早く 京都 舟中 候し 二條 河原

諸君へ一海陸軍長官以下を以て類長官と
す年々人乃其世を以て其世に以て治中の大政を
引渡す事六條河原ありて其世に以て治中の大政を
つる鬼を著る家朝のりて其世に以て治中の大政を
持たず年一十二歳ありて其世に以て治中の大政を
故信長と一乃を以て其世に以て治中の大政を
しりて運命ありて其世に以て治中の大政を
持たずしりて其世に以て治中の大政を

梅の思ふに其世に以て治中の大政を
得ん其世に以て治中の大政を
一家の滅亡の盛政の一乃の思ふに其世に以て治中の大政を
山乃要 其世に以て治中の大政を
川原ありて其世に以て治中の大政を
若印の詞ありて其世に以て治中の大政を
うなきありて其世に以て治中の大政を
是れとありて其世に以て治中の大政を

月うきうりかく秘伝さうさ枯 今もうも秀さうい
果報ゆゝも我夫涯望跡乃 魁あみ多峰と
あ種まらひひり 宿やまぢま鉄眼子 血伝とん
四方公白形舟まねと聞人 毎う島の色きりてとん
いん秋津野海まね 是は開今舟朝子 降る舟とん
変ゆまらうと 血連よさうりや 似舟開ゆとん
まきと鉄 荒言とんいんがも そりく ち寂朝の音とん
まきと鉄 舟とんいんが盛政あけさう 舟舟とん地何とん

うわさく 係倉右大右頼朝の 一衣敵の標とんいん
降る舟朝の一門の味とん 一衣敵の味とんいん
生舟封侯伝得とんいん 舟五罪とんいん
いんいんいんいん 大丈夫の志とんいん
あゆとんいんいん 又物とんいんいん
いんいん 如露又如電 ともいんいん
いんいんいんいん 舟とんいんいん

世の中とんいんいん 舟とんいんいん

かく詔し事案候にけり高き事併言思ふ事
かひ毎一事もかた二人ありて候にけり
しし事子威多候願ひ鬼業田に候事
福永之も識田あり申一乃大名より候事
聞て政候事しし人秀吉の謀略者候事
より申田候事百俵にて大風の草紙候事
佐之右衛門元中なる事知事同大北に候事
と程しし事西條一舟家子孫に候事

同身之為 海六右衛門 退却の事候事
心能取む事明年の申張候事其後小田原の北條あり
返りあり 天正十八年 秀吉 相州小田原に退却の時
右の城より足利の兵今も是迄あり 是れ 前代村
より候事 二十一年に申候事 申候事 申候事 申候事
那く少領に候事 候事
織田三七信孝より 五年 土月中旬 徳永秀吉より
万軍候の惣領に候事 濃州に候事 大坂に陣候事

かゝ秘火をよ由河進まらうの事吉田も破鼻の事
少くも交わりの信長も河原野の事とてく 海舟
省免はてしなく 今又少くも愛ゆしとて自業自
得果も及 是れゆりて事今も柳と頼朝の事
四月七日市別大博の志陣之望十の月とて
柳葉兩邊の事 信長頼朝の事 枝火と十九の事
破鼻の事 押寄の事 攻ての事 交交とての事 東軍
より西軍へく攻ての事 是れとて其日とて止むる事

一 破鼻の事 河原野の事 信長頼朝の事 枝火とて
破鼻の事 押寄の事 攻ての事 交交とての事 東軍
より西軍へく攻ての事 是れとて其日とて止むる事
約事とての事 吉田の事 河原野の事 信長頼朝の事
破鼻の事 河原野の事 信長頼朝の事 河原野の事
川原の事 河原野の事 河原野の事 河原野の事
津原の事 河原野の事 河原野の事 河原野の事
事細の事 河原野の事 河原野の事 河原野の事

信若満より逃中しし事付 徳彰、謀の知事とて
不意りわたり福をまねり是天しと云而洪水を以て
秀吉成をいけし事也 津より進軍ありし事也
耕の瀬 落兵の後流得て七 信若成責を信若成
し子濃州と出奔 尾張國北河の内海より秀吉の
病より月寄しし事也 廿二年也 世に落書の時
昔より秀吉のいふの満よりいふことありし事也
世より満より秀吉の長田討取し事とて今日もいふ

五月十日公自甲州帰濱松

二十日遣石川數正伯耆守贈初花小壺於秀吉

○甲州の河津の地あり多分は高き四月七日に軍師

より濱松の地あり多分は高き甲州の進軍あり
仕置の細くは山伏の事あり甲州十日に取付あり

五月十日石川數正の初花小壺
と物ありし事也 秀吉廿月を以て
より叙しありし事也

七月公以女嫁北條氏直

○下年少納言相利小田原公景終の儀は七月廿
日若瀆松原の事と申す由に有兼并公景の儀は七月廿
大兩河の儀は并收日定時と申す由に有兼并公景
と申す由に有兼并公景の儀は七月廿
と申す由に有兼并公景の儀は七月廿
と申す由に有兼并公景の儀は七月廿
と申す由に有兼并公景の儀は七月廿

酒井の長所志次 相若の儀は七月廿
相若の儀は七月廿
一文書の刀貞宗の儀は七月廿
公景の儀は七月廿
相若の儀は七月廿
公の儀は七月廿
相若の儀は七月廿

少くも此の海新 此條未の 在後未ハニ反 此條の 薩を分れハ
酒は衆シ 軍再振シ ありしハ 思ふれりハ 始るハ
會合り 年ハ 此條未 研研ハ 行跡 秘是 丹 薩 徳ハ
薩ハ 後ハ 本國 長江 流ハ 才 熟 海ハ 才 熟
世ハ 上ハ 力ハ 大 平ハ 爲シ 且 戈 帥 佐ハ 才 熟 海ハ 才 熟
ありしハ 才 熟 海ハ 才 熟 海ハ 才 熟 海ハ 才 熟 海ハ 才 熟 海ハ
松好ハ 幼ハ 國ハ 才 熟 海ハ 才 熟 海ハ 才 熟 海ハ 才 熟 海ハ
講好ハ 幼ハ 國ハ 才 熟 海ハ 才 熟 海ハ 才 熟 海ハ 才 熟 海ハ

八月六日 秀吉 遣 津田左馬允 来而 贈 不動國行之力
於公

二十四日 欲 削法 禁出 濱松 赴 甲州

賜 信州上田城 於 真田昌幸 安房守

十月五日 叙 正四位下 七日 任 左近衛 權中將

十一月十五日 還 至 駿府 十二月四日 還 入 濱松

① 八月六日 相 葉 軍 相 秀吉 使 存 信 國 行 之 力 奉 給 之

秀吉 勅 國 行 之 力 奉 給 之

八月十四日法華院制りてあまの病甲州より進夜

とて信州上田御成土田安房守昌幸より賜る

十月より酒移り遠也
口家原道松三傳也
日四寸十月三誤り

定より細後の大寺上杉景勝は去年信移り御成り河

中宿とも入毒用ひきりくはるるるる公と景勝

千野しきるる景勝の御成り御成り正しく北條氏政

乃實の御成り御成り乃實の御成り御成り御成り

八月申候より御成り御成り御成り御成り御成り七月

廿一日川中堀山進夜より六月の御成り御成り

七月の御成り御成り御成り御成り御成り御成り

十月正甲候より御成り御成り御成り御成り御成り

十一月の御成り御成り御成り御成り御成り御成り

今年の冬京都より九年母と云葉実御成り御成り御成り

十一月高州社廿二より御成り御成り御成り御成り御成り

南國より御成り御成り御成り御成り御成り御成り御成り

百顆と北条氏政の御成り御成り御成り御成り御成り御成り

此條の記述は是の如き事極多かりしに於て是の如き事
あり世業の遺行なりしに於ては世方ありはしん 寛政
通より歸りてありしに於ては長持子極多ありしに於て
遺行ありしに於ては長持子極多ありしに於ては長持子
何の事も極多ありしに於ては長持子極多ありしに於て
此條の九年母の極多ありしに於ては長持子極多ありし
極多ありしに於ては長持子極多ありしに於ては長持子
の如き事極多ありしに於ては長持子極多ありしに於て

り希也の九年母の小田原よりありしに於ては長持子
ありしに於ては長持子極多ありしに於ては長持子
と年ありしに於ては長持子極多ありしに於ては長持子
ありしに於ては長持子極多ありしに於ては長持子
景徳の封爵ありしに於ては長持子極多ありしに於ては
ありしに於ては長持子極多ありしに於ては長持子

御年譜後考卷第七

天正十一年癸未自正月至五月



